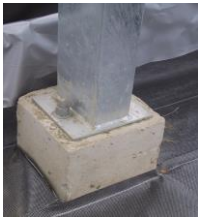


2.園芸用ハウス建設費のコスト縮減

【低コスト耐候性ハウスと

は】一般的に普及している鉄骨補強パイプハウス等の基礎部分や接合部分を、強風や積雪に耐えられるよう補強・改良することで、ガラス温室や鉄骨ハウス並の耐候性(風速50m/s以上又は耐雪荷重50kg/m²以上)を備えるとともに、設置コストが鉄骨ハウスの平均的価格の概ね7割以下であるもの

台風や積雪等の気象災害を受けないため、被覆資材を毎年取外す必要がなくなるほか、周年栽培が可能となり、単収の飛躍的向上が期待できる。



ソイルセメントを用いた基礎部の補強



接合部分の強化



ブレースの増設



きくでの導入事例

【園芸用ハウスの建設コストの上

昇】本県においては、トマト、花きなどにおいて低コスト耐候性ハウスの導入が進んできており、台風が襲来する時期においても生産が可能になるなど、年間を通した安定生産に結びついている。

しかしながら、近年、骨材の価格や建設労賃の高止まり、附帯施設の高度化などにより、施設建設コストは年々、増加してきており、平成20年の導入価格と比較すると約20%上昇し、農業所得向上の妨げになっている。

【先進的な取り組み事例】

低コスト耐候性ハウスの導入が進んでいる地域では、施設のコスト縮減を図るため、以下の取り組みがなされている。

- ①ハウスの規格(間口など)や附帯施設(暖房機、環境制御機器など)の仕様の統一化
- ②大規模区画でのハウスの整備(基盤整備を行った圃場でのハウスを導入)
- ③工期の確保(施工業者に対し、工期の確保を図ることで、労働力の効率化と労賃の縮減が図られている。)
- ④発注の集約(リース事業を用いて、同じ仕様のハウスを大量発注することで、スケールメリットを出している。)

普及に当たっての留意事項

- ・農地中間管理事業の活用や基盤整備などによる施設用地の確保
- ・作目毎のハウスの仕様の決定
- ・計画的な事業実施